MIRAI.新聞（２０２１年１２月、vol.２０）

アウトソーシング オフィス
MIRAI.

《MIRAI.新聞、コースケ近況編》

主旨

今号は私コースケがお届けします。

私は、「躁うつ」という特性を持っているのですが、この１０月末～１１月末まで、うつ状態、というか大袈裟に活動を自ら止めていた時期でした。

というのは、父の死があったからです。

その激流を、私がどう乗り越えたかを、心情の移り変わりをメインに追っていこうと思います。

予兆

父は喉を慢性的に痛めてました。

なので、先が短いやもと覚悟はしてました。

そして、後悔しないように常々父に優しくしてきたつもりでした。

ですが…。

父の死

あれは忘れもしない 10 月 27 日、つまり私の誕生日のちょうど 1 ヶ月前のことでした。

その日私は都合で仕事を休みプライベートなことに一日を費やすつもりでしたが、午前１０時頃、母からの電話。

「こうすけ…」

その母の声は嗚咽混じりでした。

「どうしたの？！」

私は即座にその電話の緊急性と重大性を悟りました。

「お父さん…、心臓動いてない…」

「すぐ行く！！」

…私が病院に駆けつけると、嫁に行った姉と妹も私が着いた後、合流しました。

…父はというと、医者に死因の特定のための死後解剖をされていました。

それを待つ間、私達は警察に他殺の可能性はないか聞き取りをされました。

しばらく経ち、死因は心筋梗塞だと解りました。

喉の慢性的に痛めていたのは心臓が原因だったようです。

他殺の可能性はナシということで警察はそそくさと帰っていきました。

やっと父に会えると、母が

「なんで私おいて行っちゃったのー！

早すぎるよー！！」

と、泣き崩れました。

…父の胸を見ると、メスをいれられた後に縫合された痛々しい傷跡があり、私は

「たとえ心臓は止まっていても、父は痛みを感じたのではないか」

と感じ、心がザワついてたまりませんでした。

葬儀

しかし、お通夜、及び、葬式、によって、忙殺させられたことは、まだ救いでした。

通夜は父の死の翌々日に廻り焼香で行いました。

葬儀は身内と、そして通夜を自身の出張で参加できなかった父の会社の社長と部長のみで、こじんまりと執り行いました。

葬儀は私が喪主を務めました。

しかし、正直なところ、どんな式にするかは母、総監督は叔父、お金関係は義理の弟、葬儀に関する人間関係は義理の兄、が全てやってくれて、仕事能力において非力

な私は、なんて役立たずな喪主なんだと終始思っていました。

何より、父を想うべき葬儀に臨んでさえ、自分のことしか考えていない自分が恥ずかしかった。

そして、私は緩やかなうつへと突入していきました。

沈黙の一か月

喪主を務める葬儀を、なんとか乗り越えた私でしたが、体はもううつスイッチが入っちゃっていて、そう長くない時間の後、うつに捕まってしまいます。

その間、寂しいでもない、悲しいでもない、なのに、なぜか気づくといつの間にか父について想いを巡らせていました。

私の想いは、父が迷っていないだろうか、父が地獄行きになったりしていないだろうか、という、心配の想いが全てでした。

それは、なんとも形容しがたい感情でした。

父からのありがとう

しかし、母の口から朗報を耳にします。

実は僕の叔母、つまり母の弟の妻が、軽い霊能者で霊の声が聞こえる方なのですね。

でも彼女は霊に振り回される訳ではなくいつもニコニコしている素敵な人です。

その叔母が、僕の父がその叔母に対して「ありがとう。

家族でいてくれてありがとう」

と言っていたと母から聞いたのです。

それを聞いて私は心底安心しました。

感謝を抱いている人間は、迷いようがなければ地獄に堕ちようもないからです。

実は、父に対して心配ばかりしていた時は、父の御前に座って数珠を手にして鐘を鳴らして合唱することが、とても苦しかったのです。

ですがそれ以降、朗らかに、軽やかに、本当に感謝の想いで父に向き合えるようになりました。

その後の私

その後、私には３つの変化が起きました。

１つ目は、私の総合的な色々な力を、父が
自らの命を散らせることにより、格段に底上げしてくれたこと。

２つ目は、私に人の苦しみ・悲しみ・つらさ、などの本質を教えてくれて、私を生まれ変わったがごとく優しくしてくれたこと。

そして３つ目に、私に、沈黙の中にこそたくさんの愛があるということを教えてくれたことです。

父は完全に沈黙の存在になってしまいましたが、私はむしろ父が生きていた時よりも強く父からの愛を感じています。

沈黙の中にこそ、透明の中にこそ、たとえ聞こえず見えねども、たくさんの愛が詰まっていました。

それを父は背中で教えてくれました。

お父さん、ありがとう。

感謝・合掌。